

博報堂教育財団 第14回「日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名(フリガナ) 在住国名	加賀谷 真子(カガヤ シンコ) アメリカ合衆国
所属・役職	ウイリアムズ大学アジア学部・教授
招聘回(招聘研究期間)	第14回(2020年3月1日～2020年8月26日)
受入機関	早稲田大学
招聘研究テーマ	門付芸萬歳の興亡から探る芸能と民衆文化
研究目的	基礎資料の収集、芸能の現地調査・体験 平安期から継承されてきた門付・祝福芸能が、20世紀になぜ衰退消滅したのか。現在伝承されているのならば、どのように伝承されているのか。及び、現代における芸能と民衆文化、その必要性と意義、未来への展望等についての考察。
研究成果概要	
1. どのように研究を進めたか(具体的に)	
<p>I. 基礎的研究として、平安期、及び中世、近世の民衆と芸能について基礎資料の収集。早稲田大学中央図書館、坪内博士記念演劇博物館は非常に充実していて、これらを研究訪問者として利用できたことは大変ありがたかった。</p> <p>II. 各地に伝わる萬歳の实地踏査。具体的な作業対象として、①重要無形民俗文化財として継承されている福井県の越前萬歳、愛知県の三河萬歳、尾張萬歳の芸系、伝承形態、その変遷、②他地方に伝わる秋田、会津、加賀、伊勢、大和萬歳などの芸系、伝承形態、その変遷についての調査。</p> <p>III. すでに消滅した芸能が素材として生かされている伝承形態の考察。例えば、秋田県の横手萬歳を素材として、柴田南雄により作曲作譜されたシアター・ピース「萬歳流し」の意味するもの。</p> <p>*I、IIIに焦点を置かざるを得なかった。新型コロナウイルス感染症危機の中、IIの实地調査は3月に予定を立てたが、実行に移すことは外出自粛要請も始まり不可能となり、ネット検索やインターネットを使ったインタビューなどに限られた。</p>	
2. 研究によりどのような知見が得られたか(具体的に)	
<ul style="list-style-type: none"> 平安期、中世、及び近世を通した芸能、特に千秋萬歳の由来と変遷について、基礎資料の収集、整理、読み込みを通した考察。 萬歳の現在について文化庁国指定文化財等データベースを使い調査。 重要無形民俗文化財として指定されている総数171件の民俗芸能の中、語り物・祝福芸に分類されるものは6件、内万歳が3件：愛知県の三河万歳(1995年指定)、尾張万歳(1996年指定)、福井県の越前万歳(1995年指定) 選択無形文化財—記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財—として選定されている647件中、語り物・祝福芸に分類されるものは8件、内万歳が4件：秋田万歳(1973年選拓)、加賀万才(1978年選拓)、野大坪万歳(1971年選拓)、三河万歳(1971年選拓) 重要無形民俗文化財、選択無形文化財、全て保護団体により継承されており、継承とは何か、また、その継承のかたちが問われている。 横手萬歳の歴史的変遷、演目、特徴などの資料の収集、整理、読み込みを通した考察。 作曲家・音楽学者の柴田南雄(1916-1996)の著作、作品群について資料の収集、整理、読み込みを通した考察。特に日本の民俗芸能や社寺芸能を素材に使い、視覚的演劇的側面を加えた「シアター・ピース」と呼ばれる作品群の構想、創作、上演について。 「シアター・ピース」七曲中、二作目の『萬歳流し』の構想、創作、上演、その記録について、特に詳しく資料収集し、考察を加える。 秋田県湯沢市出身の齋藤真文がリーダーを務めるバンド『アラゲホンジ』(2007年結成)の秋田萬歳を素材とする『平成秋田萬歳』(2011年、CD『アラゲホンジ』)について。各地の民謡や郷土芸能をリリリにアレンジして、「今」に蘇らせて、ライブで唄い、踊っている。『ニッポンのマツリズム』の著者・大石始は、「祭り囃子がラテ 	

ン・ファンクと絶妙に配合されていたりと、かなりユニークな内容。村祭りのな爆発力を持ったライブ・パフォーマンス」と表現している。斎藤は、「芸能は土地の精霊や魂のようなものを記憶しているの、ひとりでも多くの人がそれを伝えていかないといけないんじゃないか」と述べているが、その土地の精霊や魂のようなものを、何かグローバルな、潜在的な大きなものとして発信し、その場にいるものを包み込んでいくような感覚は柴田南雄の「シアター・ピース」にも繋がるのではないか。

- 消滅した芸能が数多ある中、新しい伝承、創造のかたちも生まれていて、それは人々の奥底にある何か潜在的なものを呼び起こす可能性をも含んでいるのではないか。

3. 研究成果(予定を含む)

○論文(題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略(200字以内))

研究成果を論文として発表することを検討している。

○口頭発表(題目, イベントの名称, 日・場所, 内容の概略(200字以内))

“Succession of an extinct world of congratulatory-at-the-gate (*kadozuke*) performance to the future, an example” (消滅した祝福・門付芸: 未来への伝授の一例)ヨーロッパ日本研究協会第16回国際大会2021年8月25-28日、於ベルギー、ゲント大学

○その他の活動

- I. 芸術芸能活動が全般にわたり自粛され、上演も中止される中、古典芸能界の方々は様々な形で発信を続けておられる。オンライン公演、ワークショップ、質疑応答、レッスン、またファン、サポーターは特定の役者や団体へのクラウドファンディングなどを行なっている例もある。これは演者と観客、師匠と弟子などが同時に同所に集うというこれまでの形から、時空を越えて繋がる新しい形態だ。その一例として、これまで大学の講堂で行われてきた武蔵野大学能楽資料センター公開講座を、オンラインで発信する試みの収録に参加させていただいた。「世相を描く能・狂言一山伏狂言の意味するもの」という題目で、狂言「梟」、小舞、付祝言、人間国宝山本東次郎氏と能楽研究者羽田祖氏の対談などの収録が七月、杉並能楽堂で行われた。次々と何ものかに感染し最後は祈祷者まで感染してしまう姿を描いた狂言「梟」を、新型コロナ感染症危機の真只中で鑑賞できたことは、中世の人々の未知なる病への畏怖の念にも想いが及ぶ貴重なものだった。この講座の模様をオンラインで発信する一翼として、概要と狂言「梟」の英字幕を担当することになった。古典芸能の新しい伝播・伝承形態の一つとして取り組んでいきたい。
- II. 早稲田大学児玉竜一教授に受け入れていただき、このほど研究機会を得られた。新型コロナ感染症危機という未曾有の状況下、児玉先生との学問的交流がほとんどできなかつたことをとても残念に思う。先生のゼミなどにも参加させていただきたかったが4月からは大学全館閉館となるなどしてかなわなかつた。海外にいては難しい日本国内の研究者との交流、学会、研究会、シンポジウムへの参加、古典芸能上演なども、ほぼ全てが3月末には止まってしまった。3月上旬に参加した学会(楽劇学会)、研究会(ドイツ日本研究所レクチャーシリーズ)、鑑賞した能(鏡仙会能楽研修所)、歌舞伎(歌舞伎座)などが最後となった。その後は徐々にオンラインでのワークショップ、インタビューなどがもたれるようになった。いくつか参加した中、特に早稲田大学総合人文科学研究センター 角田柳作記念国際日本学研究所主催のオンラインでワークショップ、「テキスト遺産の利用と再創造: 日本と現文学における所有性、作者性、真正性」は有意義であった。

4. 今後の活動予定

- I. 今期研究期間では、新型コロナウイルス感染症危機の中でできなかつた各地に伝わる萬歳、他、芸能の実地踏査を実現させたい。このコロナ禍の影響で芸術一般、(世界)無形文化遺産である古典芸能全てでさえも上演を中止せざるを得ない状況下、すでに衰退の一途をたどっていた民衆芸能が、更に逼迫した状態であろう事は想像に難くない。
- II. 萬歳の粋をこえた門付・祝福芸能の現状況、衰退、消滅した芸能について調査を続けたい。土地固有の芸能、また放浪芸がどのような盛衰を繰り返し、どのように衰退、消滅していくのか、また継承されていくのか、そしてそれはその芸能に関わる民衆、新しい継承の形となるもの、それを創り出す者、その創造に立ち会う者とのように繋がっていくのか、考察を続けていきたい。